

## 津波と文学

### ―『生神様』と『稲むらの火』を手かがりに―

櫛 殿武

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました櫛殿武です。本日はお足下が悪い中、お越し頂きましてありがとうございます。

まずは、本日の発表テーマ「津波と文学―『生神様』と『稲むらの火』を手かがりに―」について少し説明させていただきます。

「津波と文学」というタイトルですが、昨年の三月十一日の東日本大震災、そしてその直後に大津波が発生しました。それにより、震災と津波というテーマが大きくクローズアップされ、社会から注目されました。テレビに様々な専門家が出演されました。地震研究の専門家や、建築工学、海洋研究分野の方々もコメンテーターとして、出演されました。中でも大きな自然災害の時には、文学がいったい何ができるのかという疑問が僕自身の中で生れてきました。もちろん、文学は実学分野の学問ではなく、今すぐに震災の復興に役立つものではないが、自然災害に際して、文学の意味、もしくは役割をもう一回考えてみる貴重なチャンスとして、今回は、あえて「津波と文学」というテーマを取り上げてみました。

本日取り上げる作品は、ラフカディオ・ハーンが書いた『A Living God』という作品で、邦訳名は「生神様」ですが、今回は『小泉八雲作

品集 第八巻』（平井呈一訳、恒文社、昭和三九年）の訳文をテキストとして使わせていただきました。さらに、「稲むらの火」は『小学国語読本尋常科用巻十』（文部省、日本書籍、昭和一三年）に掲載されているものを使わせていただきました。

今日のお話に登場するラフカディオ・ハーンについて、私はラフカディオ・ハーンの研究者ではありませんが、私が専攻している夏目漱石と、妙に接点が多く、そういう意味で言えば、私にとって非常に気になる人物です。さらに、ラフカディオ・ハーンは美しい文章を書くことで定評があり、語学教育という仕事柄、彼の文章に少し注目しています。また、いままでの二回の講座では、岡田先生と鈴木先生が日本の文学作品を中心に講演されたので、今回は、あえて外国関連の作品を取り上げて、お話をさせていただきます。

また「稲むらの火」という作品は、本日まで来場の皆様の中には、おそらく小学校時代に勉強されたことがあったのではないかと思います。当時の思い出を思い出して頂くという意味で、昭和時代の『小学国語読本尋常科用巻十』のテキストを資料として使いました。

お手元のレジュメを確認いたします。発表レジュメは二枚あります。そのほかは資料です。資料一は『朝日新聞』のコピーで、二枚あります。資料三は小泉八雲の作品集の中から、『A Living God』第三章の前半の部分で、こちらは三枚あります。最後は「稲むらの火」のテキストで、こちらは二枚。全部で九枚です。

この「稲むらの火」の主人公、五兵衛の実在のモデルである濱口儀兵衛は、雅号を梧陵と言い、濱口梧陵という名前さまざまな文章に登場していますが、この人が東金市近くにある銚子市に住んでいて、ヤマサ

醤油の七代目の当主で、千葉県に関連のある方です。そういうわけで、いろいろな要素が集まって、今日のテーマに繋がっていると思われれます。

### 記録に見る明治二九年の三陸津波

先週、鈴木啓子先生のご講演「泉鏡花の洪水幻想」の中にも、明治二九年六月一日に発生した三陸沖の津波災害について、お話がありました。少し繰り返し返しになる部分もあるかと思いますが、これから本日の発表に入ります。

まず、津波災害についてですが、昨年三月一日の東日本大震災後の津波の映像を見まして、ショッキングな場面がたくさんあったと記憶しております。本来、映像をお見せしなかったつもりですが、あまりにもひどい場面ですし、皆さんがテレビ報道などでさんざん見せられたと思いますので、映像を控えさせていただきます。

明治二九年六月一日は、旧暦で言いますと五月五日で、端午の節句にあたります。その日の夜七時三二分、岩手県宮古東方沖二〇〇キロの時点（北緯三九・五度、東経一四四度付近）を震源として、マグニチュード八・五（推定）の巨大地震が発生しました。数字を見ますと、マグニチュード八・五（推定）が巨大地震ですが、さまざまな記録を調べますと、宮古地方の陸上では軽い揺れしか感じなかったといわれています。そこで当時の人はあまり気にしなかったようですね。しかも、旧暦五月五日は端午の節句なので、家でお祝いをしていた家庭がたくさんありました。このような偶然が重なり、一層被害が大きくなってしまいました。地震発生から一五分後、沿岸の海水が引き始め、さらに一五分後の夜八

時ごろ、第一波の大津波が襲来しました。

被害地域は北海道から宮城にわたる広い地域で、津波は約六分の間隔で数回襲来したと言われています。六月二五日『東京朝日新聞』の記事によりますと、津波による死者・行方不明者は青森県では三四六八、宮城県では一、三一四人で、さらに六月二九日『東京朝日新聞』によりますと、岩手県では二三、三〇九人、岩手県の被害者は約九割を占めたそうです。その根拠としては、資料の一枚目に『東京朝日新聞』復刻版のコピーがありますが、こちらは明治二九年六月一日付の記事に地図があります。地図のちょうど真ん中のところに宮古という地名がありまして、その左側に田老というところがあります。その田老というところに大きな被害が出たのです。岩手県の海岸線の地図を見ていただくと、その真ん中に地形的に言いますと、小さな湾が数多くあり、いわゆるリアス式の海岸ですね。沖では、津波の波はそんなに高くないですが、海岸に近づくにつれて、だんだん高くなって、更に湾に入っていくと、その何倍も高くなるというふうに言われています。場所によっては、当時の記録で、三八メートルの高さにも達し、実際今回の東日本大地震の津波より高かったというふうに考えられます。資料一にある『東京朝日新聞』（明治二九年六月一日付）には「津波の歴史」という記事がありますので、ぜひご覧になっていただきたいと思えます。

現在、津波の歴史に関しては、いろいろな説がありますが、過去に残った記録をもう一回見直してみるのも非常に価値があることだと思います。しかも記事の下にスケッチの挿絵が入っております、当時写真が非常に貴重なもので、新聞社はなかなか写真が取れない中で、『東京朝日新聞』明治二九年六月二四日と二五日付の記事にスケッチがあり、リ

アルに当時の悲惨な場面を再現しています。明治二九年六月の『東京朝日新聞』を調べてみると、まず電報で地震の第一報が報じられ、次の日と、さらにその後、毎日のように被害の状況が報道され、当時の津波被害の深刻さが手に取るように分かるようになっていきます。明治二九年の『東京朝日新聞』は、すでに科学的に津波を解説して、地震そして津波の発生した原因、地図を添えながら報道していました。さらに、いまと同じように義援金の記録も載っています。まず「三陸大海嘯遭難者義捐募集」（『東京朝日新聞』明治二九年六月一八日付）の呼びかけがあり、その後個人の名と金額、かなり詳細に掲載されていました。これには本当に驚かされました。

津波は『東京朝日新聞』の記事には、「海嘯」と書いてありますが、これは今の「津波」という字と違うのですね。「海嘯」という言葉は中国語から輸入されたと言われています。実は上海の近くにある杭州に、钱塘江という川がありまして、毎年旧暦の八月に、月の引力の関係で、河口から川の水が逆流する「海嘯」、いわゆる钱塘江大逆流が発生すること、観光客がそれを見に押し寄せてきます。それはともかくとして、今の津波は「海嘯」という言葉を起源としています。

資料二にある「大海嘯の痕」（一）を見てみましょう。

（資料）「宮古、鉾ヶ崎の両町ハ海嘯後今日に至るまで既に一週間を経過したれども人足不足にして押潰されたる家屋建物未だ片付らるゝの運に至らず海岸より山手にかけて其儘堆く積み重なり今日唯僅に人の通行し得べき一線路を通じたるのみ」

（『東京朝日新聞』明治二九年六月二八日付）

この描写で一応当時の状況がわかりますね。今度の大津波の後もそういう状況ではないでしょうか。この記事の真ん中の挿絵をご覧ください。ければ、大津波の後の悲惨な状況が痛いほどわかります。この段落の最後の部分ですが、字が小さいため、意味だけ説明しておきます。

記事によりまずと、三陸沖の津波災害について、その大きな被害を受けた田老村というところですが、死体は木の枝に刺されて木の上にとまっている場面もありますし、また炉端に座っている人がふだん神様を信じている利益なのか、神棚に突き上げられ、助かったとか、さらに、鉾ヶ崎小学校がたまたま高台にあつて、その校庭で幻灯会、つまりスライドで映像を放映する催しが開かれて、四、五〇〇人の観衆がまつたく津波のことを知らないまま救われたとか、あるいは猟師さんが船に乗って沖に出て漁をしていたので、ぜんぜん津波に気づかなかつたそうです。これはたびたび報告されたケースですが、沖に出て、漁をしている間に、大津波が発生し、気がつかないまま、港に戻ってきたとき、村の風景が一変したと言われています。

「大海嘯の痕」（二）の記事と挿絵を見ますと、津波災害後の救助活動が展開されている場面が描かれています。当時の津波災害が文章だけでなく、挿絵などからも多くのことが読み取れます。例えば三陸地方の津波は、およそ六〇年ごとに襲ってくると言われていますが、テレビの報道を見ますと、今回の東日本大地震の大津波は、われわれに大きな衝撃を与えました。二〇〇四年のインドネシアの大津波も記憶に新しい津波被害でした。さらにさかのぼって、一九八三年の日本海中部地震の際に、秋田県の小学生が遠足中に津波に襲われ、一三人の児童が亡くなったという惨事が発生しました。今回の東日本大地震の大津波の映像を見ると

きに、印象に残っているのは、年配の方がビデオカメラで撮影している場面がありました。新聞記者がその方に訳を尋ねたら、大津波のことに ついて、お祖父さんから聞いたことがあるが、自分の目で見ることがないから、記録を撮って後世に残したいと言っていました。そういうわけで、記憶より映像や絵および文字の記録の重要さが今一度考えさせられます。

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)『A Living God』(『生神様』)

明治二九年の津波が発生した後、ラフカディオ・ハーンは当時の新聞を通して、津波の被害状況を知って、『A Living God』(『生神様』)という作品を書いたのです。ラフカディオ・ハーンの経歴について簡単に おさらいをしますと、父親はアイルランド出身の陸軍軍医、母親はギリシア人で、たまたまお父さんがギリシアに駐在したときに、知りあったのです。お母さんは、両親にアイルランド人との結婚を反対されたが、家を飛び出し、駆け落ちという形で、お父さんと結婚しました。ラフカディオ・ハーンはギリシアに生まれ、生後一年半で父の仕事の関係でアイルランドのダブリンに移り、四歳の時に両親の不仲により、母親と生き別れました。それで、彼は非常にさびしい幼少時代を過ごしたと言われ、これは彼の心に傷跡を残したわけです。この経歴は彼の人生の中で、特に作品の中にも、ずっと出ています。一八六三年、左眼を失明します。その後、彼はフランスにいる叔母のところへ預けられ、カトリックの学校に入学し、寄宿舎生活を送りますが、非常に厳しい生活を経験させられました。一九歳で単身渡米し、行商、電報配達人、ホテルのボーイ、ビラ配り、コピーライター、校正係など、様々な職業を経て、新聞記者

となったわけです。

『タイムス・デモクラット』紙の文学担当者としてモーパッサン、ゾラ、ドストエフスキー、ハイネなどの翻訳・紹介者となりますが、一八九〇年(明治二三)四月に新聞社の派遣で来日し、八月に給与などの条件のよいお雇い外国人教師の仕事を選び、島根県の松江中学に赴任しました。年末に小泉セツと結婚し、大家族を養う責任を負うことになりました。家族のぬくもりを知らないラフカディオ・ハーンは、日本で初めて大家族の中の一員となり、責任が重いですが、大家族のよさをもしみじみと感じとったようです。また、英語で好きな文学を教えながら、優秀な生徒たちに囲まれ、慕われていたため、松江時代は、ラフカディオ・ハーンにとって日本生活のなかで一番幸せな時期だと言われています。

明治二四年(一八九一)一月に熊本第五高等学校に転じましたが、明治二七年に神戸の『クロニクル』紙に入社し、『知られざる日本の面影』をアメリカで出版して、日本紹介を始めたわけです。

明治二九年(一八九六)八月に上京し、東京帝国大学文科大学講師となり、英文学を講義しましたが、明治三六年(一九〇三)三月退職しました。同じ年に漱石がイギリス留学から日本に帰ってきて、東京帝国大学文科大学の講師としてかつラフカディオ・ハーンの後任として、教壇に立つわけです。

明治三七年(一九〇四)四月に、東京専門学校(早稲田大学の前身)講師となりますが、急死してしまい、雑司ヶ谷墓地に葬られました。以上はラフカディオ・ハーンの略歴です。

今日のお話と関係がある部分について申し上げますと、明治二九年に八月に上京するわけですが、さきほど触れましたように、六月一五日に



三陸沖に地震と津波が発生したのです。神戸の『クロニクル』紙の新聞記者として働いていたラフカディオ・ハーンは、家族に新聞の内容を読ませて、記事を通して津波の状況を把握していたと言われています。八月に上京をするまで、ラフカディオ・ハーンが大阪で出版された『時事新聞』を読んでいたという親族の証言があります。ただ、明治二十九年（二八九六年）の三陸沖の地震と津波から、嘉永七年（一八五四）の紀州の津波を連想し、濱口儀兵衛という人物を取り上げ、作品を書くことは、必ずどこかにソースがあり、そこからヒントを得ていると思います。

レジュメの二ページにある『大阪毎日新聞』（明治二十九年六月二一日）の記事をご覧くださいと、

（資料）「海嘯襲来の種類 古来海嘯の打寄せたる模様を考えるに或は最初先ず大いに退汐したる後大潮の押し寄せ来ることあり或は一時に漫々たる潮水の空を覆いて来ることあり又或は来り或は去り一進一退遂に其の高さ山の如き海潮の寄せ来ることあり安政年度八戸の大海嘯は最初甚だしく退汐して沖の魚属など砂原に残されたるをば珍しがり漁夫が挙つて潮干狩りに押し出したる途端山の如き怒涛盛返し来つて遂に市街過半を持去りしと又紀州に起こりし海嘯は一進一退漸次に増水したるものにして当時有田郡の住民は夜中のことゆえ逃道に迷ひたるを土地の豪農濱口儀兵衛氏は早くも氣轉を利かして後ろの山に積みありし稲村に火を附けさせれば全村之を目的に駆け出して生命を助かりたりとぞ但し今回の海嘯は如何なる模様にて寄せ来りしか未だ之を知ることを得ず」

傍線の部分は、嘉永七年（二八五四）一二月に紀州・広村で発生した津波、そして村民を助けた濱口儀兵衛に触れた内容ですが、これはラフカディオ・ハーンの「生神様」のヒントになった可能性があるのではないかと思います。

さて、「生神様」という作品は、『全訳小泉八雲作品集』第八巻に所収されておりますので、わりあいに簡単に手に入ります。非常に長い文章ですので、あらずじを簡単に紹介させていただきます。

この作品は三章からなるエッセーですが、第一章では、日本における神の様態が説明されています。日本の神は自然と一体化しており、生きている人も祭られている場合があります。神様は決して目に見えないものではなく、さまざまなものが神様になる可能性があるということになります。さらに、主人公が一人称で擬人化された神様として登場し、さまざまなことを語っていますが、私の知る限り、東アジアではチベットの仏教のなかで、今でもまだ生き神たる存在があり、ゲルク派の教祖ダライラマがまさに観音菩薩の化身として崇められています。

第二章では、日本の村落の相互扶助の規約が紹介され、特に火事の際に全員が駆けつける義務があると紹介されています。ここが非常に重要で、この相互扶助の規約があるからこそ、村の人々が助けられることにつながったわけですね。もしこの規約がなければ、おそらく若い男の人たちが消火のために駆けつけ、助かるが、老人と女性、そして子供たちが津波の被害に遭っただろうと思われそうです。

第三章では、濱口五兵衛が登場して、そのエピソードが語られています。資料三の第三章を読んでみます。第三章の始めに、東北地方の宮

城、岩手、青森を襲った高潮が紹介されて、その後、濱口五兵衛の話になります。

(資料)「ある秋の夕方のことであった。浜口五兵衛は、自分の家の縁さきから、ちようど下の村の方で賑かな祭礼の支度をしているけしきを見おろしていた。その年の秋は、村はひじょうな豊作だったので、村の百姓たちは豊年祝いに、氏神の境内で豊年踊りをもよおそうとしているのだった。五兵衛の家の縁さきから見ると、さびしい村の往還の人家の屋根の上に、祭礼の幟が風にはためいているのが見える。竹竿を二本立てた間に、花ぶさのようにつるした提灯や、鎮守の宮の飾りつけなどが見えるなかに、はでななりをした村の若い男女が集まっているのが見える。その夕べ、五兵衛といっしょに家にいたのは、ことし十歳になる小さな孫だけであった。」

『全訳小泉八雲作品集』第八巻

(平井呈二訳、恒文社、昭和三九年、一八頁)

ここに孫が登場し、登場人物が五兵衛と孫二人ですね。

(資料)「あとのものは、みないち早く村の方へ出かけて、るすであった。あいにく、五兵衛はその日、気分がちとすぐれずにいたので、さもなければ、自分も家の者といっしょに出かけていたところだったのである。」

同上

こういうふうには、まず五兵衛は自分の家において、家は高台にある。孫と二人で、うちにおいて留守番をしている。体の調子があまりよくないため、祭りには行かなかつたと、説明されています。

(資料)「日のうちは、いやにむしむしと暑い日だった。そろそろ日が傾きだして、海の方から夕風がそよそよ吹き上げてきていくくせに、それでもまだ息苦しいような暑さが去らずにいる。こういうむしむしした暑さは、日本の百姓の経験によると、どうかすると季節によつて、地震の前ぶれになることがある。はたして、しばらくたつと、地震がやってきた。人を驚かすほどのつよい強いやつではなかつたけれども、しかし浜口は、今までに何百回となく地震の経験をもつていたから、とつさに、これはへんだぞと思つた。長い、ゆるやかな、ぐらりぐらりとゆれるような揺れ方であった。たぶんどこか遠方におこつた大地震の余波だったのであろう。家全体がいくどか、ミシミシ、グラグラと少しずつ揺れ、まもなくそれは静かにおさまつた。」

(前出、一九頁)

設定としては蒸し暑い日で、地震は体感がありましたが、大きな地震ではなく、ミシミシ、グラグラと静かに揺れていました。濱口五兵衛は、年取つた老人で、しかも十歳ぐらいの孫がいるとされています。

(資料)「地震が止んだ時である。浜口の年老いた目ざとい目は、

たちまち、気づかわしげに村の方へ向けられた。よく人は、どこか特定の地点とか物をじっと見定めるとき、ふとその注意が、自分で意識して見ていない、なにかべつの物を感じて、ひょいとそちらへ逸れることがあるものだ。はじめから視野の外にある、自分でそれと意識しない漠然たる外界のなかに、どことなく常とは違う感じを受けて、注意がそちらへ逸れるのである。浜口がそのとき、ふと沖あいに、なにかふだんと違うものをみとめたのが、それであった。かれはついと立ち上がると、海を眺めやった。海はすでもう暗くなりかけていた。」

(前出、一九頁)

(中略)「村の衆たちも、この不思議には、すぐと気がついたようであった。むろん、いましがたの地震をからだに感じた者はひとりもなかったらしいが、この汐の動きには、どうやらみな驚いているようすだった。みんな波打ちぎわへ走って行って、そこから汐のぐあいを眺めていた。」

(前出、二〇頁)

つまり、夕方に周りがだんだん暗くなったところ、地震のあと、汐が引いていくことに、ほかの人も気がついて、海のほうへ走って行って、海岸の様子を確認しているのが見えたのです。

(資料)「なかには、水ぎわから先の方へザブザブはいつて行って見ているものもあった。ここの浜で、こんな汐のぐあいを見る

のは、げんに生きている者の記憶にはないことだった。その見たことのないことが、いま、目の前におこりだしたのである。浜口が見ているうちにも、凸凹のある広い砂底や、藻のぶら下がった磯根の岩などが、ぐんぐん現われてきた。が、浜にいる連中は、だれひとり、この物凄い干潮が何であるかに気づいているものはないようであった。

(前出、二〇頁)

こういうふうに、村人が津波の危険性を認識せず、引き潮に氣を取られ、好奇心で海岸へ走って見物に行ったわけです。ご存じのように、津波が襲来するときに、まず引き潮が見られて、魚や貝など、さまざまな海の生き物が砂浜に取り残されてしまうので、それを拾いに行く人が多いのです。それが一番危ないですね。

(資料)「兵衛自身も、生まれてから、こんなようすは見た覚えがなかった。しかし、子どもの時分、自分の父の父が、いろいろ自分話して聞かせてくれたことがあって、それを五兵衛は記憶していたし、それに、昔からここの浜に言い伝えられていることなら、たいていのことは知っていたから、海が今何をしているのかということが、五兵衛にはわかった。おそらく、五兵衛はその時、村へすぐに使いのものを走らせるか、それとも山の上の住職に早鐘をつかせるか、それに要する時間を、とっさの間に考慮したにちがいない。けれども、それを考えるに要した時間よりも、その考えたことを村の連中に伝えるに要する時間の方が長くかかることは、わかりきつ

ていた。そこで五兵衛は、さっそく孫に呼びかけた。――」

「忠！——急いで——大急ぎで、たいまつを点けて来う！」

「たいまつというのは、松薪に火をともしたもので、これは海のしけた晩や、鎮守の祭事に使うために、浜方の家にはどこにも備えてあるものだ。孫は、そのたいまつにすぐと火をともした。五兵衛老人は、それを孫の手からひったくるように取るが早いのか、急いで田圃へ飛び出して行った。田圃には、老人の全財産ともいふべき数百の稲塚が、もう取り入れられるばかりになって、そこちちに立っていた。五兵衛老人は、斜面のきわに立っている、一ばん手近の稲塚に駆けよるが早いのか、そこに並んでいる稲塚から稲塚へと、持っているたいまつを、老の足の急げるかぎり、順々に燃しつけはじめたのである。日に乾ききった稲塚は、たちまち、附け木のようにバリバリ燃え上がった。火勢をおおる汐風が、見る見るうちに火焰を陸の方へと吹きつけ、やがて無数の稲塚は次から次へと炎々と燃え上がり、黒煙は幾条かになって天に押し、さらに黒煙は相集まって、さながら団々たる雲のごとく、もうもうと渦を巻いた。孫の忠は、びつくり仰天して、おろおろ震えながら祖父のあとを追ってきて、叫んだ。」

「おじいさん！あにするだ！おじいさん、あにするだ！あにするだよ！」

「が、老人は返事をしなかった。訳など言っている暇はなかったのだ。かれは、ただひたすら、危難の迫っている四百人の生命のことばかりを考えていたのである。」

(前出、一二頁)

こういうふうには、孫が五兵衛老人の命令に従って、たいまつに火をつけて、自分の田んぼにある、全財産ともいふべき取り入れたばかりの稲塚に火をつけたのです。これで、村の四〇〇人も生命を救ったのですが、その光景を見て、孫の忠がおじいさんは気が狂って自分の家の稲に火をつけたのだと怖がっていました。そして最後に、孫はおじいさんのやったことの意味を悟り、感動しておじいさんに謝りました。非常に長い文章ですが、以上が主な内容です。

#### 濱口儀兵衛（梧陵）とはどのような人物か

次に、作品の主人公である五兵衛のモデル、濱口儀兵衛（梧陵）という人物について、説明したいと思います。文政三年六月一日（一八二〇年七月二四日）生まれで、明治一八年（一八八五）四月二日になくなりしました。紀伊国の広村、現在は和歌山県の有田郡広川町で生まれたのですが、家業は代々醤油醸造業をしていました。現在はヤマサ醤油株式会社が広く知られていますが、聞いたところによると、ヤマサのマークは上に山の形で、下にカタカナのサと書いていますが、本来は、下の部分はキだそうです。キが横になっているので、カタカナのサに見えるのですけど、本来はヤマとキだったようです。レジユメの濱口家の系譜をご覧いただきますと、濱口儀兵衛は紀州湯浅の醤油商人である濱口分家の七右衛門の長男ですが、梧陵は養子として六代目儀兵衛（保平）のところに入ったのです。養子になったのは一二歳のことで、本来は、紀州で育ったけれども、五代目儀兵衛に気に入られて、養子として本家に



出されたため、修行の一環で銚子に連れて来られたのです。

最初は使用人と一緒に、作業場に入つて、仕事をやっていたのですが、ちょうどこの時期に、黒船が日本にやってきた頃で、若者たちはずいぶん影響を受けたわけです。濱口儀兵衛も海外へ出て行こうと思つたのですが、幕府からの許可が下りなかつたため、彼は広村に戻つて、耐久舎という学校を開設し、後進の育成を目指したのです。

嘉永七年（一八五四）に七代目儀兵衛を相続し、ちょうどこの年一月四日、五日の二回にわたつて大地震が起りました。四日は南海大地震で、五日は東南部の地震です。マグニチュード八・〇ぐらいの大地震ですね。

旧暦の一月四日、五日ですが、新暦で言うと、一月二三日と二四日にあたります。そうすると、「生神様」の中の季節の設定が違うことは分かります。物語の季節の設定は秋ですが、本当は冬の寒い時期なのです。これが時期の設定の違いですね。そうすると、もうひとつの疑問が生まれました。取り入れた稲は一月二三日と二四日になつてもなおそのまま田んぼで乾燥されるのか、まずそんなことはあり得ないので、もう脱穀して、米は取り入れて、稲村はたぶん屋根や冬越しに使われる藁になるはずですよ。

さらに、梧陵が作品の中で、高台にある自宅にいとさされていますが、梧陵の日記によりますと、広村の八幡神社の近くにある田んぼの稲村に火をつけたのです。その神社は、高台にあるのではなく、実は道路より六メートル高いところにあると言われています。経験則で言うとうと、そこより高い津波が来ないということで、津波の避難場所とされていたのです。梧陵は庄屋でかつ商人で、地元の若手のリーダーでした。

作品の中で梧陵は一〇歳の孫がいて、老人と設定されているが、濱口儀兵衛の生い立ちを見ますと、嘉永七年のとき、梧陵は数え年で三四歳でした。まさにこれから家業を継いで地元の若手のリーダーとして力を発揮する頃でした。

もうひとつは、高台に四〇〇人が集まったとありますが、実は四〇〇人ではなかつたのです。当時広村に四〇〇軒の家があつて、人数はそれ以上のはずです。広村は江戸時代に商売がたいへん盛んで、紀州の人びとがとてども勤勉で、地元ではよく「湯浅千軒広千軒同じ千なら広がい」と言われていました。広村（現広川町）は、昔は湯浅と同じように醤油業が盛んでした。ただ、この地域では、湾があつてリアス式の海岸ですので、度重なつて津波の襲来に襲われて、次第に衰えてしまいました。

さらに、稲村に火をつけて人を集めた結果、全員助かつたと書いてありますが、実はこれが事実と異なります。梧陵の日記によりますと、彼自身も津波に流されて、腰まで水の中に浸かってしまいましたが、やつと神社にたどり着き、稲村に火をつけたのです。それで稲村は家のものではなくて、道ばたにある稲村だつたわけです。それで、神社に村人を集めました。全員助かつたわけではなくて、死者が三〇人ほどあつたそうです。そういった記録がありました。

梧陵が書いた日記が残っていますが、読みますと、

「瞬時にして潮流半身を没し、且沈み且浮かび、辛うじて一丘陵に漂着し、八幡鳥居際に来る頃日全く暮れたり。進まんとするに流材道を塞ぎ、歩行自由ならず。従者に命じ、道傍の稲村に火を放たしむるもの十余、之に頼りて万死に一生を得たるもの少なか

らず。(中略)「被害の概略 一、家屋流失 百二十五軒 一、合計 三百三十九軒 一、流死人 三十人」

いずれにしても、全員を助けることができなくても、梧陵がやったことは非常にすばらしい行動ですね。津波のあと、梧陵は私財を投じて、大きな堤防を造りました。その理由として、一つは津波災害から町を守るといふ防災の目的でしたが、もう一つは、災害の後、町から出て行く人が多かつたため、土木工事を起こすことにより、仕事を増やし、人口の流出を防ぐことに大きな意味があつたと考えられます。ここに梧陵という人物は商人だけでなく、政治家としての力量があつたことが立証されています。

大きな災害に際して、臨機応変に庶民を救つたことは、政治家としての素質があつたからこそできたことで、実際、晩年、梧陵は安政五年(二八五八)、銚子でコレラが発生した時に、防疫に当たり、銚子をコレラから守りました。また、後に和歌山県大参事、県議会初代議長を勤め、政治家として活躍されたわけです。そして梧陵がヤマサ醤油だけでなく、銚子汽船株式会社を設立し、企業人としても大きな足跡を残しました。明治一八年、ニューヨークで客死しました。

### 「稲むらの火」という作品

さて、「稲むらの火」という作品ですが、昭和時代の小学校の教科書の読本に収録されたものです。小学校の読本と言えば、第一期(いわゆるイエスシ読本)は明治三七年から四二年までで、第二期(いわゆるハタタコ読本)は明治四三年から大正六年まで、第三期(いわゆるハナハ

ト読本)は大正七年から昭和七年まで、第四期(いわゆるサクラ読本)は昭和八年から一五年まで、第五期(アサヒ読本)は昭和一六年から二〇まで使用されました。本日、資料として使用されているテキストは『小学国語読本尋常科用巻十』(日本書籍株式会社、昭和一三年五月二五日修正発行)に収録されているものです。

昭和九年に、文部省が全国小学校教員を対象に第四期国定国語教科書(サクラ読本)の教材を公募しましたが、作品「燃ゆる稲むら」(「津波美談」)が入選し、昭和一二年、国語教科書に「稲むらの火」と改名され、採択されました。

作者の中井常蔵は、明治四〇年二月一二日、和歌山県有田郡湯浅町大字山田、三ツ橋兼松三男に生まれ、大正一四年三月に濱口梧陵が創立した耐久学舎(私立耐久中学、後の県立校)の卒業生で、五年間通っていた通学路にある防波堤、防潮林は濱口梧陵が私財を投じて造らせたもので、中学校時代から母校の創立者である濱口梧陵の功績を聞かされました。後に和歌山師範学校本科第二部を卒業し、有田郡湯浅小学校訓導を経て、昭和三年三月に和歌山師範学校専攻科を卒業し、昭和五年八月に和歌山師範附属小学校訓導、さらに昭和七年三月に日高郡南部小学校訓導(中井と改姓)に赴任しました。

執筆の動機としては、まず母校の創立者でかつ故郷の偉人である濱口梧陵を顕彰しようとする気持ちがあげられます。

もうひとつは、昭和二年と三年の間、和歌山師範学校専攻科在学中、英語教科の教材に小泉八雲選集を学び、*A Living God*、「生神様」を読み、深く感動したそうです。文部省第四期国定国語教科書(サクラ読本)の教材公募に応募し、昭和一二年、国語教科書巻八に「稲むらの

火」として採択されました。

「稲むらの火」は小泉八雲の『A Living God』（「生神様」）の内容をほぼ踏襲して、主人公の名前も五兵衛とされているが、ただ作品の舞台は省略され、登場人物も濱口五兵衛と村人に絞られました。

（資料）「これはただ事でない。」

とつばやきながら、五兵衛は家から出てきた。今の地震は、別に烈しいといふ程のものではなかった。しかし、長いゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことのない不気味なものであった。（後略）

『小学国語読本尋常科用巻十』五二頁

（文部省、日本書籍、昭和二二年七月）

簡潔でかつ非常に緊張感ある書き出しとなっています。声を出して読むと、非常にリズムよく、心地よい文章です。内容は「生神様」とほぼ同じですので、朗読を省略させていただきます。

## まとめ

最後のまとめに入りたいと思います。実在の人物である濱口儀兵衛（梧陵）と作品の主人公の五兵衛像の実像と虚像については、年齢の差、津波発生の時期、それから避難場所、助かった村人の人数など、以下のようになざまな相違点があります。

・『A Living God』（「生神様」）

- ▼ 作品の舞台＝紀州の有田
- ▼ 登場人物＝濱口五兵衛と一〇歳の孫忠、村人
- ▼ 濱口五兵衛の行為に対する孫の誤解
- ▼ 濱口大明神が建立され、村人がお詣りする
- ▼ 日本人の宗教観に関するエッセー

・「稲むらの火」

- ▼ 作品の舞台＝省略
- ▼ 登場人物＝濱口五兵衛、村人
- ▼ 緊張感に溢れた書き方
- ▼ 感動物語

もともとラフカディオ・ハーンの記事は全体として、日本人の宗教に関するエッセーで、西洋人にとって理解しにくい、生きている人間が神（生き神）として尊敬され、拜まれている事例として挙げられたものですが、「稲むらの火」の作者中井常蔵はそれを緊張感の溢れる物語に書き換え、子どもでも分かるような言葉で、自然災害に立ち向かって、農民にとってもっとも大事な稲村に火をつけ、村人の命を救った感動物語を作り上げました。「稲むらの火」は戦前の作品でしたが、教育の材料として素晴らしく、博愛という普遍的な価値観のある物語だと思えます。

現在における「稲むらの火」の意義としては、まずは防災教育の役割が挙げられます。小学校教育において、津波の危険性を認識させる必要があります。特に東日本大地震をきっかけにその必要性が改めて感じられました。津波の怖さは、様々なところで強調されていますが、昨年

の地震の時に残念ながら逃げ遅れた方が大勢いました。やはり、地震や津波の災害の多い日本では、小学校の段階で地震、津波に対する知識を十分教える必要があるのではないかと思われれます。確かに映像も重要ですが、ただ映像を過信することなく、文字の力も非常に大きいと、「稲むらの火」を読んで改めて感じました。

次に、文学は自然災害に際して、地震を予測したり家を建て直したりするような実学の役割を果たすことができないが、文学作品を通じて、天災に遭遇して立ち向かう人間の姿が描かれ、読者に大きな感動を与え、さらに生きる勇気を与えてくれることができます。

最後に、「稲むらの火」は戦前の小学校の国語教科書に収録された物語で、現在あまり注目されなかったのですが、東日本大地震と津波災害を経験した後に、改めて読むと、教訓と洞察を示唆してくれて、いろいろ考えさせられました。

以上、本日の発表でございます。ご静聴どうもありがとうございます。

(らん ひろたけ・本学国際人文学部准教授(当時) 武蔵野大学グローバル・コミュニケーション学部グローバル・コミュニケーション学科教授(現在))